

# 113.9話 白金御行は盛り上げたい

提 督

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サークルで初心者向けシナリオライター講座を行った際に

書いた1時間創作です。

私自身まだまだ若輩者ですが、

受講してくれた後輩たちに頑張って教えていきたいと思えます。

作品自体はかぐや様は告らせたい 114話のパロディ的な内容となっています。

# 目次

113. 9話 白金御行は盛り上げたい



## 113. 9話 白金御行は盛り上げたい

ジャコジャコ♪

ジャコジャコ♪

小気味良くギターをはじく音が教室に響いていた。

「お、藤原。ギター引けるのか?」

「お遊び程度ですけどね。」

「何? 今度の文化祭で藤原も演奏するの?」

「いえ、私は出ませんよ。」

友達が文化祭でオリジナル曲もやりたいって言うのですが、

大譜表でしか作曲したことがない子なので私がTAB譜に起こし……も?」

「どうした?」

「も?」

「も?」

「いえ、気のせいです。先ほど会長に藤原も演奏するの?とされた気がしましたが。」

それはあれですね。会長の別の友人が演奏するという意味ですよ。」

大丈夫です。大丈夫です。」

「確かにそうだな、バンドは俺一人じゃできないからな。

豊崎とか風祭もやるよ。」

「……………」

文化祭バンド！

それは男子学生なら1度は憧れるであろう1夜限りのヒーロー

文化祭という陰キャさえもウェイに変えてしまう年に一度のマジックの中

大衆の注目を搔つ攫うさまはまさに憧れ。

だが、実際のところ失敗も多いのは事実

練習不足、意識の違い、果てには安物ゆえの機材トラブルなど障害は枚挙に暇がない。

だが、この男の問題はそこではなかった。

「お、教えませんよ。」

「え？何を？」

「絶対に、ぜえつつつたいに教えませんからね!!!」

そう、白金こそこの秀智院が誇る怪物。

勉強以外の才能はからつきし。何をやらせも下手という言葉すら足りないおぞましい。

それはソーラン節が浄化されてる悪魔と例えられるほどであった。

「待て待て、藤原書記。おまえ何か勘違いしているぞ。」

俺がやるのはボーカルだ、歌だったらこの前藤原に特訓してもらってそこそこうまくなっただろう？」

「な〜んだ、それならよかったです。」

会長の歌声はまだまだ青二才ですけど〜

最初のなまこからしたら脊椎動物になっただけましですよね〜

時間決まったら教えて下さいね。聞きに行きますよ〜。」

「ああ！歌いながらギターを弾くのに慣れてきたしな！

ところで相談があるんだが…」

「嘘つき！」

「うわあ、いきなり大きな声出すなよ。」

「ボーカル以外にもやってるじゃないですか!!ギターを教えた覚えはありませんよ!!

とにかく、私はギターの練習なんてしてあげませんし！

今度という今度は関わりませんよ!好きにやって下さい。もうあんな目はたくさんです!」

「そうか…」

メンバーが1人足りないから藤原を誘おうと思つたのだが…

しようがない…」

「知りません！」

「伊井野も悲しむだろうな…」

「え、ミコちゃんも一緒にやつてるんですか!？」

この時、藤原の脳内には2択が生まれた

すなわち伊井野を見殺しにするか、一緒に死すかである。

普段から自分を慕う後輩をおもちやのごとく扱う藤原だが、今回ばかりは違つた。

あんな耳からナマコを入れられるような目に何度も後輩を合わせたくはない。

簡単なことだー回弾かせて会長を諦めさせればよい。

そうすれば耳にナマコが入るのは一度で済むし、秀智院の文化祭で死人が出ることもない。

他のメンバーをやめさせてもいいだろう、会長も1人では無茶できまい。

「いいでしょう!その勝負、受けて立ちます!!」

「勝負を持ちかけたつもりはないんだが…」

とにかく手伝つてくれるのは嬉しい。ありがとな。

それじゃあ早速バンド名について考えよう会議がこれからあるからそれに出て欲し



く…」

「そんなことしてる暇はありません！早速1曲引いてみましょう！」

## 2時間後

「何で出来ちゃうの!!」

「違うじゃないですか、いつもならわーってなってぐあーってなって

そして死んだアルパカじゃないですか！

なんで！私が！教えてなのに！ギターひけているんですか!!!」

「ふ、藤原さん急にどうしたの…」

「やっぱ俺たちの演奏じゃ根っからの音楽家さんには…」

「いや豊崎、風祭気にするな、藤原がおかしいのはおかしなことではない。

それより、とりあえず一度合わせてみたがなかなかうまくいったな。

藤原のキーボードは別格で、風祭のドラムと豊崎のベースはいつも通りとしても、

伊井野の久々にギター弾いたにしては上出来だぞ！」

「ほ、ほんとですか…」

私が舞台上上がっているからって石とか飛んできません？」

「大丈夫だ！変な心配するな。」

「えへへ、ありがとうございます。」

えへへへ…」

「(むう…

完全にミコちゃんも取り込まれています…

これは私がなんとか…?」

アレ？これ別に上手くできるのならそれで問題ないのでは？」

藤原はようやく気付いた。

こうして日は過ぎていき…

文化祭当日、

「皆、俺のせいで結局全員で合わせられたのは初日の1回だけだった。

リハーサルも俺抜きでやらせてしまつて申し訳ない。

だが、3, 4人で集まつて練習も重ねてきたし、演奏技術に不安もない。

後は俺らの順番を待つてステージに上るだけだ！

盛り上げていこうぜ!!!」

「「おー!!!」」

「グスつ、本当につ、立派につ、なりましたね。」

「藤原書記…感動しているのは分かるが号泣しながら頭をなでてくるのはやめてくれ…  
第一まだ、成功していないだろ。」

「もう、これだけでも十分ですつ、あんなアリのクソみたいなサーブを打っていた会長が

…

悪魔のカスみたいな踊りをしていた会長が…

うう…グスツ」

「お前一応女子なんだからもう少しまともな表現を…あと鼻水拭こうな。」

「あの…」

ちよつといいですかとでもいうように伊井野が手を挙げた。

「その…あまり上手く言えないのですが、何か忘れているような…」

「何か？」

「練習はやってきましたがどうにも腑に落ちないというか。」

具体的には昨夜布団の中でやり忘れてたことを思い出したんですけど、

メモってなかったの朝には忘れてて…」

「うーん、仮に何か忘れててももう舞台裏まで来ちゃっているし、

俺らの出番まで15分とないぞ?もうできることなんて」

「あ!」

「先輩何か思い出しましたか!」

「MCですよ!MC!」

「えっMCって2曲目の”Hey day狂騒曲”の後にある4分ぐらいのあれだろ?

4分ぐらい適当に話すつもりだったけど…」

「ダメ!!駄目です!!!」

MCというのはいくつか鉄則があるんです!!

その中でも基本的なものに話す内容を詳細に決めておくというものがあります。

ちゃんと決めておかないとボーカル後の興奮で上手く話せませんよ。」

「うくん、それじゃあ渾身の一発芸を…」

「駄目!!!」

寒いギャグを言って逆に笑いを取るのもライブではマイナスです!」

「寒くないのに…」

「そうですね…まずはお客さんに名前を知ってもらうのが大事です。

ただ、よく勘違いしやすいのは『名前だけでも覚えて帰ってください』と言うのは

あまり意味がないそうですね。

もともとこれは2007年のM-1グランプリ決勝戦でサンドウィッチマンが言ったボケですし、

「へー」

「やはりここはバーンと『俺たちは〇〇です!!』というところから始めて…」

あ、私たちのバンド名は計5 回以上言っておいたほうがいいかもですね、

そのほうがよっぽど覚えてもらえます

それから…それぞれの自己紹介は…」

「藤原さん、

もう本番まで10分も無いんだぜ、そんなに詳細に決めたいも覚えられるわけ…」

「…確かに…そうですね…」

ではここは妥協して…」

「ふっ、おいおい俺を誰だと思ってる?」

秀智院を代表する生徒会長、白金御行だぜっ

安心しろ、ここで決まったことは全部覚えてやる!」

「「「か、会長／＼／＼」」」

\*\*\*\*\*

「早坂！早坂！見て見て会長よ!!」

「知ってますよ。というかカメラを回しとくように命じたのはお嬢様でしょう?」

「当然じゃない!会長がバンドをするのよ!!」

「だからといって使用人10人も動員してカメラ回さなくても…

大体、私たちのクラスの出しm…」

「しっ!」

「会長がしゃべるわ。」

「皆!今日は集まってくれてありがとう!!

俺たちは……………」

「……………」

「……………」

「……………?」

「アっ、イヤ、ソノ…」

「バっ」

「バンド名決めるの忘れてたあああああああああ」

決めてもないことは覚えられなかった

本日の勝敗

かぐやの勝利

(あたふたするお可愛い会長を見れたため)